L.v.BEETHOVEN

SYMPHONY No.9

d-minor

'CHORAL'

新響第九特別演奏会

Sayoko O.

新響第九特別演奏会

THE NEW SYMPHONY ORCHESTRA SPECIAL CONCERT "CHORAL"

指揮	芥川　也寸志	合唱	合唱団 "鯨"
独唱	ソプラノ　常森　寿子（19日）		ノインテコール
	ソプラノ　小池　容子（21日）		武蔵大学合唱団（19日）
	アルト　秋葉　京子		独協大学合唱団
	テノール　金谷　良三		武蔵野合唱団　（21日）
	バリトン　平野　忠彦	管弦楽	新交響楽団

曲　目　　PROGRAM

I　「トリスタンとイゾルデ」より「前奏曲」と「イゾルデの愛の死」・・・・・・・・・・リヒァルト　ワーグナー
"Prelude and Isolde's love death" from "Tristan and Isolde" ・・・・・・・・・・・・・・・ Richard Wagner

II　交響曲　第9番　ニ短調　「合唱付」　作品125 ・・・・・・・・・・・ルードヴィッヒ　ヴァン　ベートーベン
Symphony No. 9 Dminor "Choral" Op. 125 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ Ludwig van Beethoven

第1楽章　アレグロ　マ　ノン　トロッポ，　ウン　ポコ　マエストーソ
1st mov.　Allegro ma non troppo, un poco maestoso

第2楽章　モルト　ヴィヴァーチェ
2nd mov.　Molto vivace

第3楽章　アダージォ　モルト　エ　カンタービル
3rd mov.　Adagio molto e cantabile

第4楽章　プレスト――アレグロ　アッサイ
4th mov.　Presto――Allegro assai

1973年12月19日(水)　21日(金)　午後7時
全国勤労青少年会館　サンプラザホール

——音楽監督・常任指揮者——

芥川也寸志

Yasushi Akutagawa



1925年　東京生まれ。
1949年　東京音楽学校研究科作曲部を卒業。
作曲を伊福部昭氏、指揮を渡辺暁雄氏に師事。
＜作品＞交響三章、トリプティク、交響曲第1番、エローラ交響曲、オスティナート・シンフォニコ、オペラ「広島のオルフェ」、チェロとオーケストラのためのコンチェルト・オスティナート　他
＜著書＞音楽の現場、私の音楽談義、音楽を愛する人に、音楽の基礎、音楽の遊園地。

新響創立以来の常任指揮者、毎週土曜日に殆んど欠かさず新響を振るその情熱は、「アマチュアには、アマチュアらしい、プロには絶対にない素晴らしさがなければならない。スポーツの世界にも通じるような、練習に練習を重ね、ただひたすらに自分たちの音楽を追求しようとする純粋な心。これにのみ支えられた輝くアマチュアリズムがなければならない」という信念に支えられているといえましょう。現在、ヤマハ音楽振興財団の常務理事として新しい音楽教育システムづくりを企画するなど、多忙な生活を送られています。

新響第27回定期演奏会

日　時　　1973年3月31日(日)　午後6時半開演
会　場　　東京文化会館大ホール
曲　目　　牧神の午後への前奏曲・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ドビュッシー
交響曲第35番「ハフナー」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・モーツァルト
交響曲第5番・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ショスタコービッチ
指　揮　　芥川也寸志
入場料　　S：700円　　A：500円　　B：300円（全席指定）

独唱者のプロフィール



☆ **ソプラノ　常森寿子　（つねもり　としこ）**

東京芸術大学卒、藤原オペラの《カルメン》のミカエラでオペラにデビュー。1968年渡伊、ローマ、サンタ・チェチリア音楽院及びミラノにて学んだ。1970年、イタリアのロゴーニ国際コンクールで第2位、ジュネーブ国際コンクールで銀賞を受賞。1971年帰国し、《フィガロの結婚》のスザンナで好評を博した。

よく通る美しい高音域と安定した歌唱力は衆目の認めるところで、《リゴレット》のジルダ、《ルチア》のタイトル・ロール、のほか《フィガロの結婚》のスザンナはヨーロッパの主要劇場歌でも第一級で通るとクルト・ヴェス氏から折紙つき。

☆ **ソプラノ　小池容子　（こいけ　ようこ）**　　**二期会々員**



東京芸術大学専攻科修了。関種子氏に師事。1967年度音楽コンクール第2位入賞。1969年以来《ラインの黄金》のヴォークリンデ、《蝶々夫人》の蝶々夫人、《椿姫》のヴィオレッタ、《ボエーム》のミミ、《カルメン》のミカエラ、《ジプシー男爵》のザッフィなどを歌いプリマドンナの地位を築いた。

他方宗教曲にも多くのレパートリーを持ち、ヴィヴァルディの《グロリア》、ヘンデルの《メサイア》、モーツァルトの《戴冠ミサ》、ベートーベンの《ハ長調ミサ》、ヴェルディの《レクイエム》等を歌っておりコンサートシンガーとしても巾広い。



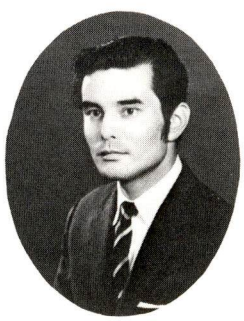
☆ **アルト　秋葉京子　（あきば　きょうこ）**　　**二期会々員**

東京芸術大学大学院修了。平原寿恵子氏に師事。

芸大在学中から、すぐれた資質を認められ，芸大オペラ、定期演奏会に出演。1971年には、ＮＨＫオペラアワーの《ルチア》でアリサを歌い、二期会のオペラ《リゴレット》には研究生から抜擢されてマッダレーナ及びジョヴァンナを演じ、つづいて文化庁青少年芸術劇場のオペラ《蝶々夫人》のケート、二期会オペラ《ホフマン物語》の母の声、《ワルキューレ》のジークルーネを歌っている。

又、第九、ブルックナーの《テ・デウム》等のコンサートでも貴重な存在である。

☆ **テノール　金谷良三　（かなや　りょうぞう）**



大阪放送合唱団を経て東京芸大卒業、東京混声合唱団の創立に参加して現在に至る。

薗田誠一、渡辺高之助両氏に師事し、岩崎宏之とは《第九》、《荘厳ミサ》、小沢征爾とは《レクイエム(ベルリオーズ)》、《ベルシャザールの饗宴》、マーラーの交響曲第8番を、若杉弘とはモーツァルトの《レクイエム》他の数々のオラトリオ、オペラで共演するなど、数え切れない多くの指揮者、オーケストラとの共演がある。

先の第1回リサイタルではリートにも深い関心を示し、特に宗教曲には人一倍の熱意と成果を示すなど、我国スピントテナーの第一人者として活躍している。



☆ **バリトン　平野忠彦　（ひらの　ただひこ）**　　**二期会々員**

東京芸術大学卒業、畑中良輔氏に師事。1961年度音楽コンクール入選。

深みのある柔軟な声をもち、芸大オペラ《ウィンザーの陽気な女房たち》のファルスタッフでオペラにデビュー、頭脳的演技で高く評価された。1961年以来、《フィガロの結婚》のフィガロ、《こうもり》のファルケ、《蝶々夫人》のシャープレス、《暗い鏡(芥川也寸志)》の青年、《パルジファル》のアムフォルタス等を歌い、68年ザルツブルグ音楽祭オペラ賞受賞、オペラ以外でも、メサイア、フォーレ、モツアルト、第九等レパートリーは広く、我国バリトン界の代表的存在。

曲目解説

「トリスタンとイゾルデ」より「前奏曲とイゾルデの愛と死」　ワーグナー

ワーグナーのロマンティックな作風はドイツ音楽の流れの中でユニークな光を放っている。19世紀迄の作曲家、特にドイツの作曲家の誰もが魅了された交響曲や協奏曲の様式美（或いはより狭い視野からは“ソナタ形式”の美）に惹かれなかったのは特別なことだし、それらの形式を借りずに厖大な作品を書上げた才能は驚ろくべきものである。

ワーグナーの重要な作品はもっぱら神話や古い説話に基いた壮大な音楽劇だが、大抵の場合台本もワーグナー自らが執筆した。これらの作品には普通相当に息込んだ銘題が付されており、しばしば“楽劇”の表示が用いられたし「リエンチ」の如く“大悲歌劇”と題されているもの迄ある。しかし何故か「トリスタンとイゾルデ」に限っては銘題がなく、単に“三幕物の作品”とされているのみである。だがワーグナーの一般の呼称に倣って今日では“楽劇”とされる場合が多い。

本日演奏されるのはこの作品の前奏曲と、終幕でイゾルデがトリスタンへの愛を全うするために死を選ぶ場面で唱う音楽を継ぎ合せたもので、演奏会用に管楽弦のみによっても演奏される、云わば愛と官能の音詩である。

ワーグナーの作品中でも「トリスタンとイゾルデ」はその半音階的技法によって極めて高い評価を受けている。一般の長音階や短音階は全音と半音とにより成っているため導音から主音（長調ではシからド、短調では♯ソからラ）への半音の動き（和声では属和音から主和音）が極めて強い安定感をもっており、これが調的な主導性を持ってとにもなるが、半音階に於いては半音の進行は互いに対等であり、これがことさら調的な安定感を生むことにはならない。特に「前奏曲」の部分では和声上の半音階の進行が駆使されており、これによって“無限旋律”と名付けられた何処が始めとも終りともつかないメロディーが延々と奏される訳である。

一方後半の“愛の死”の部分では肉声の動きが旋律とそれほど結抗しないので、ずっと耳ざわりの良い響きが得られている。和声的に緊張した“前奏曲”と緊張の解かれた“愛の死”とは確かにうまい組合せだが、前半の緊張感が余りに素晴しいので“愛の死”部分の安定感がやや物足りなく感じられる時もあるだろう。

「トリスタンとイゾルデ」は紛れもなくワーグナーの大傑作で、彼の後継者たるブルックナーやR．シュトラウスは「タンホイザー」よりの影響は少いとしても、この「トリスタン」からは大きな影響を受けていると想像される。しかし、さすがに初めから直ぐにこの作品の価値は理解されなかったらしく、ワーグナーが自らが初演の時の客席の反応をつぶさに観察して“すっかり退屈し切った”中年の婦人の様子などを記述したりしている。

交響曲第９番　ニ短調“合唱付”　ベートーヴェン

めったに使うべきでない形容詞である“至高の”という表現はベートーヴェンの作品にこそ最も良く当てはまる。９のつの交響曲を始めとする管弦楽曲の総て、ピアノソナタ・弦楽四重奏など室内楽曲の総ては我々の最も貴重な文化的財産であって、いかなる文明の所産とも比べ難い。かってどれほど自負心の強い作曲家、毒舌にたけた批評家といえどもベートーヴェンの作品の価値に多少とも否定的な言葉を吐いた人はなかった。

シューベルトやブラームス程の大作曲家でさえ、ベートーヴェンを凌駕（りょうが）することより作品の価値を理解し、自分も出来る限りその境地に近ずくことを理想としていただろう。シューベルトの『ベートーヴェンの後にまだ何か作曲できる人が居るだろうか』という言葉は彼の畏怖の気持をよく表わしている。

上の二人より遙かに革新的だったワーグナーやリストは、ベートーヴェン音楽の構成美を理想とするブラームス等と激しく対立して新しい音楽を標榜したが、彼らが反ベートーヴェン主義者だったかと云えば、それどころか彼らもブラームスに劣らない程のベートーヴェン崇拝者だった。特にワーグナーはにベートーヴェンに関する数多くの著述があり、彼が作曲家を志したのは「エグモント」の音楽に接したのが直接の動機であるとはっきり述べている。

ワーグナーがベートーヴェンに傾倒し始めたのは丁度この巨匠が逝って間もない頃だったが、ワーグナーは生前のベートーヴェンの会えなかった恨みを「ベートーヴェンまいり」という短かい小説を書くことで晴らしている。

この中で作者の化身たる主人公は色々な苦心の末ついにベートーヴェンに面会が許されるのだが、そこで彼が最も感動をもって聴く言葉は『人間の声はオーケストラのどの楽器よりも遙かに美しい高度な音の器官です。この声を楽器と同様に独立して用いない法はないでしょう。……私はいずれ一つの新作をお聴かせするつもりですが、その作品は合唱付きの交響曲です。……結局シラーの美しい賛歌「歓喜によせる」……』という言葉で、これはワーグナーの音楽哲学の一面と第九交響曲への強い共感を良く示している。彼の“第九”への心酔ぶりはこの曲の解釈に関する論文や全曲のピアノ曲への編曲などにも見られ、ワーグナーにとってこの曲は先人の作品の中で彼の音楽の理想を実現した作品であったろう。

曲目解説

ベートーヴェンの無上の創造的本能は9曲の交響曲に特に良く示されている。彼の作風は常にそうであるように、9曲中の1曲1曲がそれぞれ他の8曲が有さない独自の特徴を備えている。第九交響曲が合唱を伴っていることは中でも最大の特徴だが、この作品は構想が遠大であることでも異例であった。

ベートーヴェンはこの曲の完成より30余年前、生地のボンに居た23才のころ既にシラーの「歓喜に寄す」を歌詞とした作曲を意図していたと思われ、その後何度か作曲が試みられながら実現しなかった。又、第一楽章及び第二楽章の断片も完成の10数年前のスケッチ・ノートより発見されている。“合唱交響曲”に対してはベートーヴェンは彼のライフワークとして自分の作品中でも別格の地位を与えていたものと思われる。

ベートーヴェンの作曲の筆は古典音楽の大家達と比べれば速い方ではなかったが、一たび霊感を得れば超人的な没頭によって一気に作品を書上げてしまうことが多かった。その彼が“永遠の恋人”に対する如く永い間作品を暖めていたことは我々の感慨を誘うだろう。

第九交響曲にまつわるエピソードとしては、この曲の初演の時、“総監督”として舞台に立っていたベートーヴェンが万雷の拍手が耳に入らず客席に背を向けて立ちつくしていたという話が特別に名高い。自分の作品を自ら指揮する事をことの外好んだベートーヴェンは、演奏上の役割は全く無かったが指揮者とは別に舞台上でオーケストラに向って指揮をした。聴覚を失った不世出の大家が無我の境地でタクトを振る様子はもう二度とないような劇的な光景だったにちがいない。

内容的な面から第九交響曲を見た場合ゆったりとした構成が特徴的である。特に第3楽章までは他の交響曲より長い分だけ多くの要素を持ち込むというのではなく、主題の発展に重きが置かれている。

第一・第二楽章は主題の断片が示された後に主題が奏されるという共通の始まりをもっている。これらの断片（楽譜1及び2）は単に序の働きをするだけでなく楽章の中で主題そのものの如き重要な役割を果す。



第一楽章は他の交響曲の第一楽章に見られた快活な気分又は勢い込んだ調子をもたずに緩慢で壮重な気分に終始しており、これは大曲の序章にふさわしいものである。

第二楽章はこの楽章としては異例のスケルッツォだが、本来の“気分転換”の性格を遙かに通り越した高度な内容によっている。フーガを含んだ緊迫した部分と対比的に滑稽みのあるトリオからなっていて、前の部分では主題の断片のリズムとオーケストラの全休止（楽譜1参照）が非常に重要である。ちなみに“新世界交響曲”のスケルツォもよく似た形で書かれているが、この楽章と比べるとその境地の差は比較にならないほど大きい。



新響・団員募集中！（特にホルン首席奏者を求む）

入団希望者に対しては原則として、月の最終日曜日の午後、オーディションを行ない、新響のレベル、パート人員の必要度、本人の環境、入団意志などを考慮して決定します。
オーディションでは、課題曲(下記)、自由曲、初見のアンサンブル曲を演奏していただきます。

〔課題曲〕

Vn	モーツァルト	協奏曲第5第1楽章	
Vla	エックレス	ソナタ　第2楽章	
Vc	ヴィヴァルディ	ソナタ第5第2楽章	
Cb	カプッツイ	協奏曲　第1楽章	
Fl	モーツァルト	協奏曲二長第1楽章	
Ob	ヘンデル	ソナタ第1第1楽章	
Cl	ウェーバー	小協奏曲　第1楽章	
Fg	モーツァルト	協奏曲　第1楽章	
Hr	モーツァルト	協奏曲第3第1楽章	
Tp	ハイドン	協奏曲　第2楽章	
Tb	R.コルサコフ	協奏曲 第1,2楽章	
Tub	ワーグナー	マイスタージンガー	

（楽譜のない方はコピーをお貸します）

〔オーディション日程〕
1月27日(日)　午後1時
2月24日(日)　午後1時
3月24日(日)　午後1時

〔問合せ先〕
① 団員をご存知の方は団員を通して。
② それ以外の方は人事担当の橋谷幸男まで。
自宅332-4075，会社563-4451内292（キクナス石油 営業計画課）

〔申込先・オーディション場所〕
〒160 新宿区須賀町14 大湊ビル　**新交響楽団** TEL 357-5255
国電信濃町と地下鉄四谷三丁目の丁度中間、どちらからも徒歩6分、2つ目の信号、八百屋裏OPA学院のビル4F

曲目解説

第3楽章は高雅な2つの主旋律をもっており（楽譜3, 4）これに対してヴァイオリンが細緻な変奏を行う。各声部の混然一体となった美しさは将に天国的と言うべきで、中間のホルンの音階的なソロだけが幾分世俗的な音を響かせる。

第4楽章はもちろん全曲の主楽章で、構成も急に煩雑となる。オーケストラの前奏部に於ける低弦のレシタティーヴオや前楽章の回顧、その後の"喜こびのテーマ"（楽譜5）の延々とした演奏は交響曲の楽章としての整った構成は既に無視されている事を示している。



やがてバリトンの独唱が"歓喜の歌"の合唱を呼びかけてからはあくまでも人声が主役となり、シラーの長詩からとられた歓喜の気持が独唱により、重唱により、大合唱により繰り返し唱われる。そして合唱が最後に最も盛上った後、オーケストラが高潮した後奏を短く行って曲を閉じる。

この壮大な終楽章（ひいては第九交響曲）の最も素晴しい点を挙げるなら、それはこの曲が神の賛歌ではなく何よりも人間の讃歌であることだろう。そしてこの点こそが本当にベートーヴェンらしい点である。ここに唱われている歌詞は総てが格調高いが、特に強い響きをもっているのは"総ての人はみな友ぞ"或いは"人みな"（Alle Menschen）という言葉そのものだろう。

ベートーヴェンほど人間愛に燃えて一生を終った人は決して見当らない。彼自身の表現によると、彼は"音楽の才能の持ち主"ではなく"頭脳の持ち主"であり、彼の最も優れている点は"優れた作曲を多く行ったこと"ではなく"総ての人々の幸福のことばかりを考えていたこと"であった。

ベートーヴェンの如き大芸術家にとって、彼の芸術から比べたら平凡な人達が、彼にとって全くとるに足らない存在であると考える人がいたら、その考えは誤っている。天才はその感覚的世界が他人と異っているだけで既に（自動的に）孤独であり、天才ほど周囲の理解と友情に飢えている人々もいないだろう。

ベートーヴェンは女性への愛がついに満たされず、肉親達からこうむった苦痛も小さくはなかったが、"総ての人々への愛"だけは最後まで全うした。本当の話、我々の知っている最大の音楽家が傲慢な天才でなく崇高な理想の持主ちであったことは我々の大きな喜こびでなくて何だろう。

（Vla 菱沼佳史）

新響維持会員募集中!!

音楽を愛する大勢の方々の支持のもとに演奏活動が行なわれることがこれからのオーケストラ活動のあり方と信じ、維持会員制度を発足させました。◆年額1口（1200円）以上、◆今後1年間ご案内をさしあげる2回の演奏会に自由にご入場なれます。◆定期演奏会プログラムにご芳名を掲載します。◆ご入場の方にはプログラム贈呈。◆その他新響の全ての演奏会入場券が優先的に1割引で購入できます。◆住所・氏名・年令・職業明記の上現金書留で下記迄。（維持会員申込と付記）

〒160 新宿区須賀町14大湊ビル 郵便振替口座 東京177071

新交響楽団 357-5255

新響登録会員募集中!!

◆入会金はいりません。
◆演奏会の案内を往復ハガキで毎回お送りしますので、入場券ご希望の時お申込みください。
◆プログラムを無料でさしあげます。
◆申込はハガキにて、住所(TEL)、氏名、年令、職業明記の上、下記事務所まで。

（オーケストラの名曲800選）リスト頒賦中

音楽鑑賞、レコード蒐集の手引に、古今の無数の管弦楽曲の中から 800曲を選び、索引、演奏時間を付記。申込は左記事務所迄。140円(20円切手可)

合唱団 鯨

音楽には全て心があるはずです。私達は少しでもその心を読みとり、表現し（音楽を理解する人、しない人にか、わらず）あらゆる階層の人々に、それを問いかけ、投げかけ、理解し合いたいのです。これはアマチュア合唱団の1つの目標であり、アマチュアに課せられた大きな大きな課題でもありましょう。

合唱を愛する者が集まり、1つのものをつくりあげてゆく——という1点に関して云えば、何の拘束も受けない、ただの同好者の集まる任意団体である〝合唱団〟は、常に定着性、練習量あるいは経済的等々、マイナスの要因をか、えているわけです。

合唱団鯨は、学生・医師・主婦・サラリーマン等々、年令も10代から60代までと、いろいろな層によって構成されていますが、私たちは、さまざまなマイナスの要因を克服しながら、できるだけ多くの人々と音楽の素晴らしさをわかち合うことのできる団体でありたいと願っています。

現在、鯨は、発足以来あらゆる面で骨身を惜しまず私達の基礎をつくって下さった芥川先生のあとを、中村健氏を本年6月に常任指揮者に迎え、より以上にさまざまなアンサンブルを中心とした、巾の広い合唱団を目指し活動を続けて参りたいと考えています。

鯨のあゆみ

1968. 7. 3	第1回定期演奏会
12. 8	ファミリー・コンサート
12. 23, 26	新響・鯨第九特別演奏会
1969. 5. 28	ハイドン／オラトリオ「四季」
7. 17	コーラスとオーケストラの夕べ
12. 21	ヘンデル／オラトリオ「メサイヤ」
1970. 4. 8	鯨・はるにうたう
7. 1	ハイドン／オラトリオ「天地創造」
11. 25	カール・オルフ／「カルミナ・ブラーナ」
12. 21, 23	新響・鯨第九特別演奏会
1971. 6. 1	フォーレ／レクイエム
	モーツァルト／レクイエム
10. 1	TBSテレビ出演
10. 19	ファミリー・コンサート
12. 15, 17	新響・鯨第九特別演奏会
1972. 6. 6	ブルックナー／「テ・デウム」
	ミサ第3番(大ミサ)
1973. 5. 10	ベートーヴェン／荘厳ミサ曲
10. 12	楽しいコーラス演奏会
	ハイドン／オラトリオ「四季」より
	春・嵐＝合唱団“鯨”訳
	ミュージカルより　他

合唱団“鯨”団員募集

“鯨”は、私達自身の手で造り上げていく合唱団です。
どなたでも御入団になれますので、ぜひ練習を見学にいらして下さい。

＜指　揮＞　中村　豊
＜定期練習＞　毎週火曜日　渋谷カワイ楽器7階 ミュージックサロン　P.M. 6：30～9：00
＜申 込 先＞　〒160 新宿区須賀町14大湊ビル　合唱団“鯨”事務所（357）5255（但し平日午後）
（入団費500円　団費700円）

ノインテコール

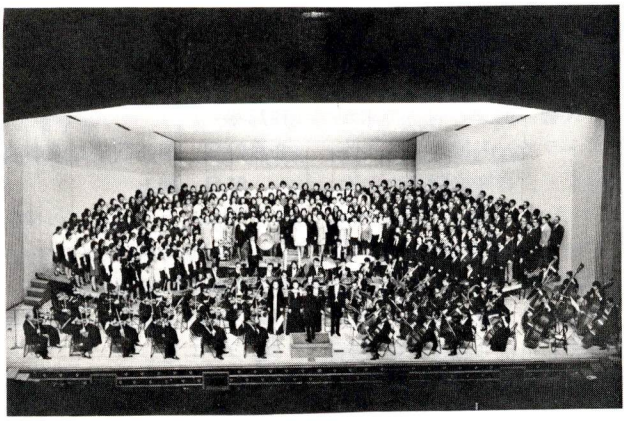
“一度でいいから大オーケストラで唱ってみたい、かの偉大なベートーベンの第九を一生に一度でいいから唱ってみたい”そんな純粋素朴な発想から昨年初め、笹倉強先生を中心に生まれたのがノインテコールです。熊谷弘先生のクラシクス運動に加えていただき、昨年は400名近くのアマチュアの第九の演奏会が日比谷公会堂にてできました。何しろ構成メンバーの多彩な事と言ったら、ひとつの町がつくれそうです。お米屋さんから看護婦さんまで入ってるんです。老若男女を問わず、東京はもとより、千葉、埼玉、神奈川の住人も渋谷の教会へ毎週水曜日には練習に通いました。そのムードの明るい事、楽しい事は「アマチュア合唱万才」と叫びたい程です。

さて一年の活動を終えて、「そんなノインテコールを一年で解散させるのは社会的にももったいない」などとオーバーな意見も出て、唱う事が何よりも好きな連中40名程で3月よりノインテの2年目の活動が始まりました。

6月にはＴＣＨの音楽会に団伊玖磨の「筑後川」にて友情出演させていただき、又、シューベルトのミサ曲等も唱ってまいりました。更に8月末には昨年同様茨城県平磯海岸にて、親睦を兼ねた合宿を行い、9月から改めて第九の練習に入りました。今年は昨年より少しでも進歩したいという願いから、ノインテコール主催の第九の音楽会を12月5日、中野サンプラザホールにて開催しました。今年のメンバーも昨年同様に、初めて第九を唱う団員がほとんどです。

そしてアマチュアらしく精一杯第九を唱いたいという情熱に溢れています。今日ここに新交響楽団の第九の音楽会に参加させていただけるのは団員一同にとって大きな喜びです。

誕生2年、何分にも未熟で未知なる合唱団ではございますが、今後ともたくさんの皆様のご指導の程よろしくお願い申し上げます。



武蔵大学合唱団
（リーベルクランツ）

学内唯一の合唱団。以前から男性合唱団としては存在したが、1969年人文学部が開設され、女子学生が入学して来るため、“フライエクンスト”の名称を“リーベルクランツ(愛の花束)”と改めたかいあって女声30名で団員数50名。週3回の練習と春、夏、秋の合宿を行っている。

指揮は、川村敬一氏、二期会の大槻義昭氏等を経て今年から東京混声合唱団の今村紘司氏にお願いしている。演奏曲目は邦人の作品が半分以上で、田園わが愛(山本直純)、合唱のためのコンポジション(間宮芳生)ミサソレムニス（パレストリーナ）などを演奏するという。

独協大学合唱団

1964年、大学の創立と共に発足しグリークラブ（男性）と共に学内を2分する。女声が若干多い団員数約40名。年1回の定期演奏会と、暮の第九ではＯＢ交響楽団と2回、新交響楽団と1回の共演経験がある。練習は週3回のアンサンブルと昼休みのパート練習、春夏の合宿と大変多く団員のハーモニーは素晴しい。

指揮は5年前から小林研一郎氏が担当、心の四季(高田三郎)、月光とピエロ(清水修)、五つの子供のうた(大中恩)、レクイエム（フォーレ）などを演奏した。

武蔵野合唱団

昭和30年、武蔵野市内在住の団地の主婦を主体として発足したが、現在は、男性を加え、70名の混声合唱団として活動している。

練習は週1回、水曜日、中央線吉祥寺駅近くの市開発公社(ＦＦビル)7階の市民ホールで行っている。

指揮は7年前から小林研一郎氏が担当し、最近の活動では、東京交響楽団とのヴェルディ「レクイエム」協演、月光とピエロ、三つの山の歌、水のいのち、などがある。

歌さえ好きであれば誰でもと巾広い年令層に参加を呼びかけている。

《連絡先》〒180 武蔵野市西久保3-3-7 ティアック西久保寮　岡本



新交響楽団

新交響楽団、新響は名前こそN響の前身と同じですが純然たるアマチュアのオーケストラで、名簿に見るように、サラリーマン、学生、主婦など、音楽を職業としない120名の団員から構成されています。

週1回土曜日、東京文化会館地下のリハーサル室での練習を基礎として、月々 500円の団費と、演奏会の収入による独立採算で運営されています。

昭和31年創立以来の常任指揮者芥川也寸志氏の献身的指導によって、現在日本で望み得る最高レベルのアマチュアオーケストラとされており、42年秋の訪ソ旅行、44年秋の沖縄九州旅行という華やかな活動がある反面、週1回2時間半の練習、実質的には何の拘束もない任意団体であるという絶対的な制約をうけているため、累積赤字をかかえて常に解散の危機に瀕しているといっても過言ではないでしょう。

新響を存続させるものは、一緒にアンサンブルを創るという一点にしかありません。2～3回の練習で演奏会をもつというプロのオーケストラにはできないような、すみずみまで奏きこんだ演奏をモットーとし、毎週の練習自体をも一つの目的とする緊張と充実が団員の共通の目標となっています。

新響のもう一つの目的は、オーケストラを団員の自己満足としてでなく、できるだけ沢山の人に聴いてもらいたいという演奏団体としての活動です。一昨年から新たに若手指揮者のホープ小林研一郎氏を指揮者として正式にお迎えし、芥川先生とタクトを分担して頂くことにより、外部からの依頼にも応じられる演奏団体としての体制をととのえつつあります。

最近の主な演奏会

1973年

3月24日　第25回定期演奏会　東京文化会館
25日　同上　神奈川県立音楽堂
＜チャイコフスキーの夕べ＞イタリア奇想曲、ヴァイオリン協奏曲(独奏：徳永二男)、交響曲第6番「悲愴」

4月1日　FM東京用録音　東京スタジオセンター
イタリア奇想曲、交響曲第6番「悲愴」、アンダンテ・カンタービレ

5月27日　東京六大学合唱連盟定期演奏会賛助出演　東京文化会館大ホール
歌劇「さまよえるオランダ人」より「水夫の合唱」＝ワーグナー（指揮：小林研一郎）

8月18日　サマーコンサート　東京文化会館大ホール
交響曲第6番「田園」＝ベートーベン、ピーターと狼＝プロコフィエフ(語り手：浪花千栄子)、パリのアメリカ人＝ガーシュウィン

8月25日　アマチュア音楽の祭典出演　杉並・普門館
スラブ行進曲＝チャイコフスキー、パリのアメリカ人＝ガーシュウィン、合同演奏曲「よろこび」＝石井歓(よろこびのみ指揮春日学)

11月5日　第26回定期演奏会　中野・サンプラザホール
交響曲第4番「イタリア」＝メンデルスゾーン、ピアノ協奏曲第26番「戴冠式」＝モーツァルト（独奏：小栗豊)、舞踊組曲「火の鳥」＝ストラビンスキー

12月1日・2日　早大グリークラブ定期演奏賛助出演演　渋谷公会堂・厚生年金会館ホール
聖チェチリアのミサ曲＝グノー（指揮：小林研一郎）
（指揮は特記以外芥川也寸志）